

Ⅲ. 新約聖書の倫理

□アウトライン

1. 「倫理」とは何か、「新約聖書の倫理」とは何か
2. 「愛」を現わす4つのギリシア語
3. 信者はアガペイなる愛を誰にささげるか
4. 愛の深さ
5. 聖霊の役割

1. 「倫理」とは何か、「新約聖書の倫理」とは何か

(1) 私たち信者にとっての「倫理」とは、

【神の命令により、信者がなすべきこと、あるいは、してはならないこと】

(2) 「新約聖書の倫理」、すなわち、新約聖書の中で新約時代の信者に神が命令しておられることは、一言で言えば、「愛」である。

ヨハネ 13:34~35 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。

ヨハネ 15:12~14 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。

ヨハネ 15:17 あなたがたが互いに愛し合うこと、わたしはこれを、あなたがたに命じます。

(3) 「新約聖書の倫理」とは、私たち信者が互いに愛し合うことである。

では、愛とは何を意味するのか。

2. 「愛」を現わす4つのギリシア語

- (1) エロス・・・性的な愛。英語の「エロティック」の語源であるが、ギリシア語のエロスそのものに悪い意味はない。新約聖書の中には、ギリシア語のエロスが使われている箇所はない。
- (2) スタルガイ・・・自然に、あるいは本能的に引きつけられて抱く愛。たとえば、母性愛。母親が自分の子どもに対して抱く愛は、スタルガイである。これも新約聖書の中では使われていない。
- (3) フィレオ・・・感性が合う、共感し合うときの愛。たとえば、親友に抱く愛。男女間の恋愛感情の初期、結婚まではまだ考えていないが相手が気になるという段階の愛も、フィレオに含む。

マタイ 6:5 また、祈るとき偽善者たちのようであってははいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。

マタイ 23:6 宴会では上座を、会堂では上席を好み、

ヨハネ 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。

Iテモ 6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。

新約聖書の中では、信仰の家族である兄弟姉妹に対する愛や、夫と子に対する愛について、ギリシア語のフィレオが使われている箇所がある。

ロマ 12:10 兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。

テトス 2:4 そうすれば、彼女たちは若い女の人に、夫を愛し、子どもを愛し、

(4) アガペィ

愛するという意志をもって愛する愛

新約聖書の倫理において「愛」と言えば、このギリシア語アガペィである。自然に湧きあがる愛スタルガイではない。共感し合って親しくなる愛フィレオでもない。愛するということを選択し、私はこの人を愛しますと約束して、愛することである。男女が結婚しようと決断するときには、このアガペィの愛の上に立たねばならない。この愛は、他の人を幸福にしたいと願う愛である。

3. 信者はアガペィなる愛を誰にささげるか

(1) 神とメシアに対して

マタイ 22:37 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

【補足：ここでは「心、いのち、知性」と訳されているが、人の内側の6つの要素のうち、心・魂・思考の3つ。あとの3つ、霊・意志・良心が関係ないということではない。6つは互いに重なり合っていて不可分である。ここでは、人の内側を表現するのに、3つの要素を挙げている。信者は、自分の内側のすべてで主を愛そうとする者である】

ヨハネ 14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。

(2) 配偶者、特に夫が妻に対して

エペソ 5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。

エペソ 5:28 同様に夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。

エペソ 5:33 あなたがたもそれぞれ、自分の妻を自分と同じように愛しなさい。

(3) 兄弟姉妹に対して

ヨハネ 13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

Ⅱコリ 2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私^{パウロ}があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。

(4) 霊的な指導者に対して

Ⅰテサ 5:12~13a 兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で勞苦し、主^{イエス}にあってあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、その働きゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。

(5) 教会に対して

エペソ 5:25 キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように（この箇所では、夫に対する勧めとして、キリストが教会を愛したように、妻を愛しなさいとある。キリストが教会を愛されたのだから、信者もまた教会を愛し、教会の霊的成長のために働くことは信者の責務である）

コロ 1:4 キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対して抱いている愛について聞いたからです。

（「すべての聖徒に対して抱いている愛」、これは、自分たちが所属する地域教会を愛するだけでなく、他の地域教会も愛するということである。私たち信者は、キリストのからだである、一つの普遍的教会に、ともに属する者たちである）

(6) 教会の個々の信徒たちに対して

Ⅱコリ 2:4 （上記、(3) に同じ）

(7) 隣人に対して

マタイ 22 : 39~40 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

(イエスが受けた質問は、「律法の中でどの戒めが一番重要ですか」であった。イエスは、神を愛することと隣人を愛することの二つに、「律法と預言者の全体がかかっている」と教えた。神を愛するなら、神との関係についての律法を守ることになる。隣人を愛するなら、人との関係についての律法を守ることになる。預言者たちが伝えたメッセージも、神を愛し隣人を愛することに集約される)

ルカ 10 : 29, 36~37 「では、私の隣人とはだれですか。」「この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

(アガペイの愛は、他の人を幸福にしたいと願う愛である。「私の隣人とはだれか」と問うのではなく、私たちの助けを必要としている人がいれば、その人の隣人に自分になろうとして、その人の隣に来る愛である)

(8) 敵や迫害者に対して

マタイ 5 章はモーセの律法についての正しい解釈を教えるものであり、新約時代の信者に適用されるものではないが、次の箇所は敵や迫害者を愛せよという神のみこころを示している。(なぜ適用されないかは、23 ページの【補足】を参照)

マタイ 5 : 43~44 『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

敵や迫害者をも愛せよという神のみこころを前提に、新約時代の信者に次のように命じられている。

I ペテロ 2 : 20~23 善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなか

った。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。

I ペテロ 3:9 悪に対して悪を返さず、侮辱に対して侮辱を返さず、逆に祝福しなさい。 あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのです。

14~16 たとえ義のために苦しむことがあっても、あなたがたは幸いです。人々の脅かしを恐れたり、おびえたりしてはいけません。むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求め人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの善良な生き方をののしっている人たちが、あなたがたを悪く言ったことを恥じるでしょう。

I ペテロ 4:12~14 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っ
てはいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。もし、キリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。

4. 愛の深さ

不信者もアガペイの愛をある程度は示すことはできるが、その深さには限界がある。
ヨハネ 5:42 しかし、わたしは知っています。あなたがたのうちに神への愛がない
ことを。(不信者の中には神の愛はない。よって、不信者のアガペイには限界あり)

新約聖書の倫理における「愛」は、人間の力を超えている。その愛の深さは、超人的なものである。

ヨハネ 15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。

ヨハネ 15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

信者の人間的な力では、どう頑張っても、キリストが私たちを愛したように互いに愛し合うことなど、できない。では、どうしたら、そのような深い愛を実行できるのか。

5. 聖霊の役割

信者がアガペイの愛を実行する力は、聖霊の力によるものである。

ロマ 5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

コロ 1:7~8 そういうものとして、あなたがたは私たちの同労のしもべ、愛するエパfrasから福音を学びました。彼は、あなたがたのためにキリストに忠実に仕える者であり、御霊によるあなたがたの愛を、私たちに知らせてくれた人です。

Ⅱテモ 1:7 神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。

□【補足（私見） 「力と愛と慎みの霊」（Ⅱテモ1：7）について】

「力と愛と慎みの霊」とは、聖霊の呼称のひとつ。聖霊は、信者に力と愛と慎みを与える。特に伝道者として働くときの信者に関係する。

1. 伝道は、人の働きではなく、神の計画と恵みによるものである（Ⅱテモ1：9）。伝道の中核にあるのは、アガペイの愛である。このことをテモテへの手紙第一から見よう。
 - (1) 伝道の出発点（Ⅰテモ1：12～16）は、**神の愛**（14節）
 - (2) 伝道は、神から伝道者に委ねられた信仰の務め（Ⅰテモ1：4）
 - (3) 伝道の目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる**愛**（Ⅰテモ1：5）

2. 伝道者の働きに必要なのは、愛に加えて、力と慎み（テモテへの手紙第二）である
 - (1) 力
 - ① 臆病にならず、恥じることなく主を証しする（力）（1：8）
 - ② 神の力によって、福音のために同労者と苦しみをともにする（1：8、2：3）
 - ③ ほかに人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねる（2：2）
 - ④ すべてのことについて理解する力（2：7）
 - ⑤ すべてのことを、選ばれた人たちのために耐え忍ぶ（力）（2：10）

 - (2) 慎み
 - ① 論争などをしない（2：14）
 - ② 神のことばをまっすぐに解き明かす（2：15）
 - ③ 俗悪な無駄話をしない（2：16）
 - ④ 卑しいことを離れて自分自身をきよめる（2：20～21）
 - ⑤ 争わない、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍耐し、反対する人たちを柔和に教え導く（2：24～25）

 - (3) 「力と愛と慎みの霊」によって働くときに、次のような結果となる

どんな場合にも**慎んで**、**苦難に耐え**、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たす（4：5）。

「力と愛と慎みの霊」は、特に信者が伝道者として働くときにその働きをさせる聖霊の呼称である。

□【19 ページの (8) の補足 マタイ 5 章の命令と新約時代の信者との関係】

マタイ 5 : 43~45 『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。

この箇所をそのまま、私たち新約時代の信者に、あてはめてはならない。

1. マタイ 5 章では、イエスは、モーセの律法についての正しい解釈を教えている。

- (1) 「〇〇と言われていたのを、あなたがたは聞いている」というのは、ユダヤ教による口伝律法である。口伝律法は、聖書に書かれたモーセの律法そのものではない。モーセの律法を守るためには具体的にどうしたらよいか、ユダヤ教の教師たちが細かい規則を定め、それを守るように人々に教えたものである。
- (2) モーセの律法が「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」(レビ 19 : 18) とあるのを、口伝律法では、隣人とは誰かを論じ、加えて詩篇 139 : 21~22 を根拠に「あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め」と教えた。
- (3) モーセの律法にこめられた神のみこころは、あなたの周りにいる人々で助けを必要としている人を助けよ、特に貧しく弱く、お返しのできない人たちを助けよ、ということである(参照 ルカ 14 : 13~14)。人々を隣人と敵とに区分し、敵を憎むことではない(参照 レビ 19 : 17~18 憎んではならない、復讐してはならない、恨みを抱いてはならない)。

2. マタイ 5 章の時点は、まだ十字架の前である。

- (1) イエスは、十字架において、ご自身をささげ、すべての人々の罪の贖いとなられた。これにより、罪の犠牲として動物の血を神殿でささげることは終わった。モーセの律法は終了したのである。
- (2) また、イエスはその生涯において罪を犯さず、十字架の死にまで神に従い通したことにより、モーセの律法を完全に守った初めての人となった。イエスはモーセの律法を完全に守って、神の前に、その行いによって義と認められる最初の人と

なった。そして、人がイエスを信じる時、その人の罪はイエスの上に置かれ、イエスの義はその人の上に置かれる。これにより、信者は、自分の行いによらず、信仰によって、イエスが到達した完全な義をいただくのである。イエスひとりがモーセの律法を完全に守ったことで、信者のすべてが守ったことになる。これをイエスは、「律法を成就する（完成する）」（マタイ 5:17）と表現した。モーセの律法は廃棄されたのではなく、完成されて終了したのである。

(3) マタイ 5 章は、モーセの律法が完成され終了する前である。モーセの律法がまだ有効な時期に語られている。ここでは、イエスは、モーセの律法についての正しい解釈を教えているのである。

3. モーセの律法は、それを守って神の前に義と認められることは、人間には不可能である。例外は唯一、イエスである。それがどれほどのレベルなのか、5:48 では「**あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい**」と、イエスは教えた。では、神がモーセの律法をイスラエル民族に与えた目的は、何だったのか。大きくは三つある。

(1) 神は、エジプトの奴隷だったイスラエルを解放し、自由の民とした。奴隷に休みはないが、自由の民には休みがある。週の七日目を安息日とする定めは、モーセの律法の特徴である。安息日は、礼拝の日ではなく、休みの日である（出 20:10）。神によって解放され自由の民となったことを記念して、喜び感謝する日である。

(2) 神は、罪に堕ちて神に反逆する人類の中から、一人の人アブラハムを選び、アブラハムから一つの民族を起こして、神の「祭司の王国、聖なる国民」（出 19:6）としようとした。そして、その民族からメシアが出る。イスラエルは、全人類に神が祝福を与えるための民族である。そのイスラエルが諸国民（異邦人）と同化することのないように、「隔ての壁」（エペソ 2:14）として律法を与えた。特異な食物規定や、儀式的な汚れときよめに関する規定などは、そのためである。

(3) 神は、モーセの律法によって、何が罪であるかを明らかにされた。さらに、律法は人間の内側にある罪の性質を刺激して、その罪深さを外側に出現させる働きをする。これにより、人は自分の行いによって義と認められること、聖化されることの困難さを自覚し、救いは人の行いによらず、神の恵みであり、信仰を通して受け取るものであることを理解するようになる。律法は、人を「キリストに導く養育係」（ガラ 3:24）のようなものである。

4. 新約時代の信者に、この箇所をそのまま適用することはできない。
- (1) マタイ 5:45 に「天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。」とある。しかし、新約時代の信者は、信じたときに神の子となった（ヨハネ 1:12）。神の子という地位をすでに受けてから、メシアの律法を守るのであって、その点で順番が違う。
 - (2) マタイ 5:48 に「あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」とある。しかし、新約時代の信者は、信じたときにキリストにあって、神の目からは完全な者、という地位を受けている（コロ 2:9~10 「満ち満ちた=完全」）。